

2022/1/23

ヨハネの手紙第一 講解メッセージ⑨

『悪魔のしわざを打ちこわすため』 I ヨハネ 3:7-3:8

■何に惑わされてしまうのか

「子どもたちよ。だれにも惑わされてはいけません。義を行う者は、キリストが正しくられるのと同じように正しいのです。罪を犯している者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。」(I ヨハネ 3:7-8)

「義を行う者」とは、罪を言い表して神の赦しを受け取る者です。つまり罪人は、神にとってダメな者ではありません。これが第一に私たちが惑わされてはいけないことです。

次に「罪を犯している者は、悪魔から出た」とは、「神と分離するという状態は悪魔によって生じた」という意味で、「死の起源は悪魔にある」ということです。つまり、死は神によって与えられたものではありません。

日本語で「罪」と訳されている言葉は、原語では単数形と複数形に分けられています。原語を注意深く読むと、単数形の場合は「神と分離された状態(死)」を指し、「罪の行い」は複数形で表されていることがわかります。「罪を犯している者は、悪魔から出た」の「罪」は単数形なので、悪事を犯している者を指すのではなく、神と分離している者、すなわち、死の中にある者という意味です。ですからたとえ罪を犯しても自分は悪魔から出た者ではないのかと不安になる必要はありません。

悪魔は初めから神と分離された中にあります。そして、神の子が打ちこわす悪魔のしわざとは、この世界に死を持ち込んだことです。悪魔が持ち込んだ、神と人間を分離する隔ての壁によって、私たちは不安を覚えるようになり、様々な悪い行いをするようになり苦しんでいます。また、この世界も神と分断されたために、すべてが有限性となり朽ちる世界になってしまいました。そのことによって天変地異や食物連鎖が起きるようになり、病気に苦しむようにもなりました。神が初めに造られた世界では、神がすべてを養っておられたので食物連鎖はありませんでした。神と分断されたために強い者が弱い者を食べるようになり、その結果、本来私たちと共存すべきウィルスが私たちを攻撃するものとなってしまったのです。これが悪魔のしわざです。

悪魔は初めから神と分断された者であり、死を司る者です。悪魔のしわざによる隔ての壁、つまり、死を滅ぼすために、神の子イエス・キリストはこの世に来られたのです。

■悪魔とは

悪魔は初めから神と分離された存在ですから、神の被造物ではありません。ところが、これまでのキリスト教の伝統的な教えの一つに、悪魔とは御使いが墮落したものだという考え

がありました。天使の長であった明の明星ルシファが悪魔となり、それに従った御使いが悪霊になったというものです。しかし、実は聖書のどこにもそのような教えはありません。これは人間の想像に御言葉をあてはめて作り出された解釈です。この件については、聖書のことばは聖書のことばで解釈するというプロテスタントの大原則に則って見直しがされているところです。

聖書には、悪魔は初めから悪魔であったことが、Iヨハネ3:8にはっきり書かれています。もし天使が墮落したなら途中から悪魔になったと書かれるべきですが、そうではありません。そこで、悪魔は天使が墮落したものだという説によく引用される御言葉を通して、聖書は実際にはどのように教えているのか確認していきましょう。

「また、主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。また、ソドム、ゴモラおよび周囲の町々も彼らと同じように、好色にふけり、不自然な肉欲を追い求めたので、永遠の火の刑罰を受けて、みせしめにされています。それなのに、この人たちもまた同じように、夢見る者であり、肉体を汚し、権威ある者を軽んじ、栄えある者をそしっています。御使いのかしらミカエルは、モーセのからだについて、悪魔と論じ、言い争ったとき、あえて相手をののしり、さばくようなことはせず、「主があなたを戒めてくださるように」と言いました。」(ユダ 1:6-9)

これまでの説では、罪を犯し暗やみの下に閉じ込められた御使いが悪魔の起源だと解釈されています。しかし、神に造られたものがなぜ罪を犯すことができたのか疑問です。アダムとエバの場合は、蛇(悪魔)が神と異なる思いを持ち込んだから罪を犯すことができたのだと聖書は説明しています。ということは、御使いが罪を犯せるようにするためには、神と異なる思いを持ち込む存在がなければなりません。つまり、悪魔がいなければ罪を犯すことはできないのです。さらに、「ミカエルが悪魔と言い争った」とありますから、この時点ですでに悪魔は存在していたことがわかります。つまり、罪を犯して閉じ込められた天使とは別に悪魔が存在するということです。

なお、「永遠の火の刑罰」とは、滅びることの象徴的表現です。永遠のいのちを持たない者は肉体の死と同時に滅ぶことを教え、神を信じない者に警告を与えているのです。

では、次の御言葉を確認しましょう。

「暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。」(イザヤ 14:12-15)

この「暁の子、明けの明星」が、ユダ 1:6 で言われている御使いだと解釈して、悪魔とは

墮落した天使である根拠にしています。しかし、きちんと聖書を読むと「暁の子、明けの明星」はバビロンの王のことであると御言葉の冒頭ではっきり述べられています。

「あなたは、バビロンの王について、このようなあざけりの歌を歌って言う。」

(イザヤ 14:4)

バビロンの王とは歴史上の人物です。つまり、この御言葉は神に逆らって傲慢になった王への警告です。エゼキエル書にも同じような表現がありますが、こちらはツロの王への警告です。これまでの解釈では、これらの地上の王と悪魔が重ねられていると言われてきましたが、そもそもが人間の想像から始まった説ですから、そこに聖書を引用して勝手な読み方をするべきではありません。

私たちが悟るべき大切なことは、聖書は悪魔の起源を教えていないということです。人は決して聖書を越えてはいけません。聖書が悪魔について教えているのは、次の箇所だけです。

「あなたがたは、なぜわたしの話していることがわからないのでしょうか。それは、あなたがたがわたしのことばに耳を傾けることができないからです。あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」

(ヨハネ 8:43-44)

人は神と分離した状態にあるので、神のことばに耳を傾けることができません。神と人が分離したのは、悪魔から出たことです。「父の欲望」とは、神に属さなくなったために生じる肉の欲望のことで、人はそれを満足させたいと願っています。真理というのは神ご自身であり、神のいのちです。悪魔は初めから神と分離したものです。悪魔は蛇を使って偽り、アダムとエバを欺きました。要するに、悪魔は初めから神と何の関係もないということを、イエス様はここではっきりと語っておられるのです。

■神の言葉を理性で理解しようとしてはならない

では、悪魔はいつから存在しているのでしょうか。世界の初めは神と悪魔の両方がいたということになるのでしょうか。この疑問に対して聖書には、初めは神しかおられなかったとはっきり書いてあります。

このことは、人間の理性を完全に崩壊させます。どういうものなのか、さっぱりわかりません。そもそも悪魔は天使が墮落したという説は、初めに神しかおられないのだから悪魔は神の被造物でしかあり得ないという考え方から生まれたものです。

つまり、私たちの理性には限界があって、理性で神のことばを理解することはできないのです。だから信仰が必要なのです。聖書のことばは理性の対象ではなく、信仰の対象です。私

たちが信じるべきことは、初めに神がおられたこと、悪魔の起源はわからないけれど神とは関係がないということです。これらのことは、私たちの理性には限界があることを認めない限り、受け入れることはできません。私たちが一番やってはいけないことは、自分の限界を認めないで理性を暴走させてしまうことです。これは危険な遊びです。あなたがどう思うかではなく聖書に立つこと、これが重要なのです。

■理性には限界がある（私たちが越えてはならないこと）

私たちの理性は因果律を通して物事を考えます。つまり、すべての出来事には原因があるから結果があるという考え方です。しかし、神には原因がありません。神がすべての始まりだからです。つまり、因果律で神を理解しようとしてはいけないのです。私たちは限界を越えないようにしなくてははいけません。神は理解する対象ではなく信じる対象です。

1. 神の起源を知ろうとしてはならない

私たちが自分のわかる範囲で起源を求めようとする、唯物論に行き着きます。唯物論とはすべてが物質であるという考え方で、結局神を否定します。そこでは、私たちは偶然できた物質ということになり、いのちが軽視されるようになります。ここから生まれたのが共産主義です。共産主義は粛清という名のもと多くの人の命を奪いました。

2. 神のことを勝手に想像してはいけない

神とはどのような方か私たちが勝手に想像し始めると、自分が想像したものと違う現象に出会った時、「なぜ神はこんなことをするのか」「神がいるならなぜ」と怒りがわいてきます。そのようにつぶやくヨブに向かって神様は「あなたに私のことがわかるのか。見たことがあるのか。私と議論をしようとするおまえは何者か。」と諭されました。私たちも神を勝手に想像することはやめて、聖書のことばにとどまりましょう。あなたがどう考えるのかではなく聖書がどう教えているのかが重要です。

3. 悪魔の起源を勝手に想像してはいけない

聖書が教えている以上のことを勝手に想像してはいけません。必ず矛盾が生じます。私たちの罪は悪魔に騙されたことから始まりました。この悪魔がどこから来たのか、聖書は何も教えていません。もし悪魔が神の被造物であるなら、結局神がこのような苦しい世界を造ったことになってしまいます。神が病原菌をまき散らし、私を信じるならそこから救ってあげると言っているようなものです。そんなことはあり得ません。

4. 死後の世界を勝手に想像してはいけない

死後の世界のことを考えるのは良いのです。しかし、聖書が教えていることにとどまるべきです。自分で勝手に想像するから惑わされてしまうのです。だから聖書は「惑わされてはいけない」と教えているのです。

大事なことは聖書のことばに立つことです。聖書は悪魔について次のように教えています。

1. 悪魔は神の被造物ではありません。
2. 死の起源は悪魔です。この世界に死を持ち込んだのは悪魔です。

■悪魔のしわざ

「そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知ようになることを神は知っているのです。」そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。」

(創世記 3:4-7)

悪魔は蛇を使ってアダムとエバを騙し、その結果、二人は自分の内側が見えなくなりました。ふたりの内側にあったもの、それは神のいのちです。二人は神が見えなくなったのです。こうして二人は神から分離され、不安をいだくようになり、自分のことを恥ずかしく思っ腰の覆いを作りました。

実は、神と異なる思いを持つと神と分離してしまうことは、あらかじめ次のように警告されていました。

「しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」(創世記 2:17)

この実を食べたことによって人は神と分離してしまいました。これが、死が入り込んだ瞬間です。死によって私たちの体は神が認識できない体になってしまい、それに伴って有限性になってしまいました。そして、この世界も神を見ることができなくなり、有限性になったのです。こうした世界を作りあげたのが悪魔の仕業です。そこで、神はこのように言われました。

■悪魔のしわざを打ちこわす

「神である【主】は蛇に仰せられた。「おまえが、こんな事をしたので、おまえは、あらゆる家畜、あらゆる野の獣よりものろわれる。おまえは、一生、腹ばいで歩き、ちりを食べなければならない。わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」(創世記 3:14-15)

ここで、「彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとにかみつく」とありますが、これは、「キリストが悪魔を滅ぼす」ということを預言しています。神の最初の預言です。

「罪を犯している者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです」(Iヨハネ3:8)とは、この創世記の記事の時から始まっているのです。神の裁きの対象は悪魔です。悪魔のしわざで病気になってしまった人類は、神にとっては癒しの対象です。私たちは、ただ癒されればよいのです。「人を裁くことも自分を裁くこともやめなさい。ただ癒されなさい。私があなただを癒やすから」と神は教えておられます。罪を犯すと自分が裁かれるのではないかと誤解する人が大勢いますが、イエス様はその思い違いを次のように指摘しておられます。

「また、裁きについてとは、この世の支配者が断罪されることである。」

(ヨハネ16:11 新共同訳)

神が裁くのは、悪魔です。そして聖書は、実際にイエス様が来られて悪魔の仕業を打ちこわしたことを次のように述べています。

「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」

(へブル2:14-15)

「死の力をもつ者」、これが悪魔の定義です。新共同訳では「死を司る者」とあります。そしてイエス・キリストは、この悪魔のしわざである死を滅ぼすために来られ、十字架に架かることで死を滅ぼし、その証として復活なさいました。

つまり、イエス・キリストを信じ、主と共に生きるなら、キリストの贖いの中であってあなたの罪は赦され、よみがえることができるのです。これが神の福音です。ですから、「見える世界がどういう状況であっても、私を信じて私にとどまりなさい」とイエス・キリストは語っておられます。

「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」(Iペテロ2:24)

聖書を理解するとき大切なことは、理性には限界があることを認めて、聖書のことばにしっかりと立つことです。神にとって私たちは病人ゆえに癒しの対象であり、イエス・キリストの十字架はあなたを裁くためのものではなく、あなたをいやすためのものなのです。